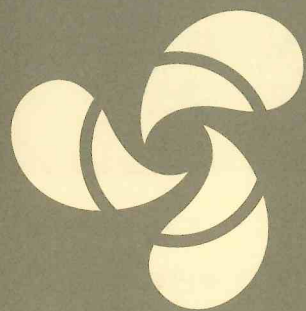


2018年4月16日

Vol.110



minmin

みみ
んん

【題字】谷川俊太郎さん



特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター ニューズレター

目次

- P1…… 巻頭言 コミットメント! 理事 白木福次郎
- P2~3 設立20周年記念シンポジウム開催報告
- P4~5 各事業所からの報告・告知
- P6…… 本部事務局からの報告
- P7…… 事務局日誌／新スタッフ紹介
- P8…… インフォメーション

巻頭言

コミットメント!

理事 白木 福次郎

2018年2月3日にNPO法人せんだい・みやぎNPOセンターの20周年記念式典を行いました。これまでの20年とこれからの20年についてのパネルディスカッションがありました。終了後に、NPOとして、またボランティアとして必要なものを参加者が紙に書いて、それを持って全員で写真撮影を行いました。私が書いたのは「コミットメント!」でした。ボランティア活動を始めた頃にある方に教えていただきました。

「何をやるにしても、頼まれて『いやいや』やるのではなく、自分から進んでやるのが大事だ、それがコミットメントということだ!」と。その言葉が、いつも自分の頭にありました。

「いやいや」やると面白くないものも、自分から進んでやると何となく面白くなって来るから不思議です。仲間に何かを頼むときも「自分から進んでやってくれればいいな!」と思いながら頼んでいます。



ともに歩む市民社会の創造～NPOに求められる役割とは～

せんだい・みやぎNPOセンター(せ・み)は、2017年11月1日で設立20周年を迎えました。それを記念し、2018年2月3日にこれまでの20年をふりかえり、今後の市民社会を考えるシンポジウムを開催しました。第1部はせ・み設立当初から関わっていた方、第2部はせ・み設立後に市民活動をはじめた方たちによる対談です。今号はその内容をお届けします。

●第1部「この20年で見てきたもの、見えてくるもの」

パネリスト

鈴木 素雄さん(河北新報社 常務取締役)

白川 由利枝さん(仙台市若林区長)

コーディネーター

大滝 精一(当センター代表理事、東北大学大学院経済学研究科教授) ※役職はシンポジウム開催時



▲第1部の様子。左から、大滝代表理事、鈴木さん、白川さん

大滝:まずは当センターやNPOとの関わりをお話してください。

白川:1995年に仙台NPO研究会に関わり、せ・み設立に携わりました。その経験が、いつも市民に目を向けるという原動力になっています。

せ・みに期待するものは、「公共」は行政だけが決めるのではなく市民が関わっていくものだとし示してくれること、各分野の活動に横串を刺してくれることです。

鈴木:マスコミには市民社会の視点が足りないという反省があり、河北新報創刊100周年企画の中で市民社会を基軸に据えることになりました。その中で、せ・み設立に関わりました。

東日本大震災では、中間支援組織があったことで少しずつNPOの土壌が生まれているのかなという実感があります。

大滝:私は企業経営について研究しています。ドラッカーの「非営利組織の経営」は読んでいましたが、当時は別世界の話のようでした。ただ、こうしたものが社会を変えていくという想いがあり、NPOの研究会などに参加するようになりました。20年前、NPOには社会を変えるという熱い想いと希望があふれていました。

行政、報道機関という立場から見てNPOや市民社会はどう

見えていますか。

鈴木:河北新報のデータベースで「NPO、東日本大震災」という2つの言葉を検索すると、2月2日現在で6,195件の記事が出てきました。また、震災直後の2011年3月14日にはすでに路上生活者支援のNPOによる炊き出し情報がありました。これまでのノウハウを被災者支援に活かすことができているのです。着実にNPOは定着し、進歩しています。

白川:私は行政職員であり、せ・み会員でもあります。市民が政策形成に関わるための組織として1995年に仙台都市総合研究機構が立ち上がり、市民と行政が向き合い協働していく仕組みをつくっていきました。私が行政とNPOの両立に違和感がなかったのは、このプロジェクトやせ・みに参加した経験があったからです。

大滝:せ・みが成し遂げたもの、道半ばとなっているものについてお話しください。

鈴木:1998年3月、河北新報創刊100周年にあわせて提言をまとめたものに、大滝さんは東北が目指す市民社会に必要な3つのことを挙げていました。

一つ目は「NPOを民間レベルで推進するNPO支援センターの創設」。せ・みでまさに達成していますし、各地域にも広がっています。

二つ目は「NPOの人材育成を目的としたインターンシップ制度の創設」。こちらは道半ばだと思います。

三つ目は「地元企業が利益の一定割合を地域社会に拠出する地域再投資プログラムの実施」。今後、地銀や信用金庫が資金を拠出していくことも必要になると思います。

白川:せ・みは、当時まだ普及していなかったコミュニティビジネスやソーシャルビジネス支援など、新しいことを見せてくれました。こうした取り組みが結実したのが東日本大震災の時です。世界中からNPOが仙台を目指してきてくれました。せ・みが、NPOが定着する一端を担ってくれたからです。

大滝:最後に、市民社会のために何を成すべきかお聞きし、第2部につなげていきたいと思います。

鈴木:NPOは必殺仕事人のように世直しをしています。その中でせ・みはお菊のような、情報を集め、お金を管理し、人

を動かす存在です。ただ、NPOはまだ裏稼業ですね。それを表にしていけることが必要です。

白川:10年前も今もNPOが市民社会を変えるという話をしています。若い人達にはぜひ社会を変えていくという想いを私たちの世代から奪い取ってもらいたいです。

●第2部「これからわたしたちが創りたいもののために」

パネリスト

阿部 恭子さん(NPO法人World Open Heart 理事長)

大橋 雄介さん(NPO法人アスイク 代表理事)

原 亮さん(みやぎモバイルビジネス研究会 会長、エイチタス株式会社 代表取締役)

コーディネーター

渡辺 一馬(当センター理事、一般社団法人ワカツク代表理事)



▲第2部の様子。左から渡辺理事、阿部さん、大橋さん、原さん

渡辺:3人の取り組みをお聞かせください。

大橋:子どもの貧困問題に取り組んでいます。具体的には学習支援、子ども食堂、フリースクールをしています。

また、関わってくれる人たちを育てたり、ノウハウを他団体に提供したり、当事者の声をもとに行政へ提案して新しい制度をつくることもやっています。

阿部:私は犯罪被害者の家族からの相談に応じ、支援しています。加害者家族の権利を守る法律や相談機関はありません。台湾や韓国へ講演にいった際、仙台での活動やせ・みのお話をさせていただいています。まさに仙台から世界へ広がっています。

原:大学で議員立法を研究し、社会人になってからも市民社会や法のあり方の研究をしていました。仙台でもっと共創の場をつくっていきたくて、ITエンジニアを地域課題につなぐ場づくりを行っています。

渡辺:市民社会には何か必要でしょうか。

原:セクターで区切らず、プレイヤーを広げていくことです。たとえば子育て情報をオープンデータにする取り組みは、すでにITエンジニアが始めています。NPOに限らず、地域課題に関わりたくて思っている人たち同士をつなぐ役割も中間支援組織に期待しています。

大橋:私たちは「参加型」を大事にしています。毎年約350人がボランティアで関わっていて7割は学生です。ただ、学生時代に活動に触れたのに就職してしまうと接点がなくなります。たとえば生涯のテーマとして活動に関わり続ける社会になればいいなと思っています。

渡辺:会社員として勤め続けることに満足できなくなった時、昔の経験が面白いと思っていれば活動に戻ってくると思います。

阿部:行政でも情報が把握できず困っている人たちを救うのが市民活動です。市民活動は、助けやすい人たちや無難な取り組みだけでなく、もっと世の中を挑発したり、本当のニーズに踏み込むべきだと思います。

渡辺:分かりやすい課題、共感を集めやすい課題はあります。でも、大事なことはスポットライトが当たっていない人たちを発見し、課題解決することです。世の中を挑発するにはどういう方法がありますか？

原:自分事として感じる、関わることの必要性を感じるのだと思います。そのために、誰もが見えるところで発信し、発信した情報を誰でも使える、拡散できるようにしておくことが必要ですね。

渡辺:大橋さんの活動は比較的共感しやすいですが、挑発についてはいかがですか？

大橋:挑発はあまりしていません。市民活動は、対決するという考え方から、多様な考えややり方があるという考え方に変わってきています。私たちの活動は多くの方に関わってもらおうというスタンスです。

渡辺:ここでみなさんに、「市民社会をつくるために私が出ること、やっていくこと」をお話いただけます。

原:「情報発信からデータ発信へ」です。各分野で何が起きているのか、データ(数字や事実)で示して誰でも使える形で発信していきましょう。

阿部:「与えるのではなく支える」です。与えるだけでは世の中がダメになってしまいます。支えることを大事にしていきます。

大橋:「他問他答しながら事業を続けていく」です。受益者ももちろんですが、いろいろな人の声に耳を傾けて活動していきます。

渡辺:「変態づくりをします」です。ここでいう変態というのは、今を良しとしない、もっとこうすると面白いのに、と思ってくれる人たちです。また、そんな人が増えてくる街をつくっていきたくて。

※阿部さん、大橋さん、渡辺理事の対談を掲載した前号「みんなVol.109」もぜひご覧ください。

(櫛田 洋一)

各事業所からの報告・告知

仙台市市民活動サポートセンター

施設の機能強化とマチノWEEK

2015年7月に施行された「仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例」において、仙台市市民活動サポートセンターは従来の市民活動支援の機能に加え、多様な主体の協働によるまちづくりの推進の拠点として位置づけられました。これをうけ、多様なまちづくりの担い手が集まり、地域の課題やまちの魅力づくりに取り組んでいくための協働の拠点施設としての機能を充実させるべく、2018年1月～2月にかけて施設の改装が行われました。施設の顔となる1階が「マチノひろば」として情報発信と交流の拠点に衣替えしました。これまでの紙媒体中心の情報発信に加え、ブース出展やトークなどのイベントを開催しやすくなりました。5階のフリースペースも、アイデア出しや会議、個人作業など、目的に応じて使い分けがしやすいようにリニューアル。床も黄色の絨毯になり、明るい印象になりました。



▲1階マチノひろば

このリニューアルに合わせて実施されたのが、「マチノWEEK vol.2 もっとつながる、もっとひろがる、まちづくりの輪」。協働の実践者によるトークイベント、地域メディアに関わる人々による公開編集会議、市民活動団体によるブース出展など、市民が、まちづくりとつながり、その輪をもっとひろげるための企画を2月21日～27日に実施しました。7日間にわたり実施された11の企画の参加者数はのべ1,126人。新しい仙台市市民活動サポートセンターをPRする良い機会となりました。(太田 貴)

多賀城市市民活動サポートセンター

大盛況御礼!たがさぼのクリスマス雑貨市



▲子どもからお年寄りまで幅広い世代が集まりました

2017年12月10日に「たがさぼのクリスマス雑貨市」を開催しました。5回目となる今回は、学生を中心としたボランティアの皆さんにもご協力いただき、「この活動をしなければ関わることがなかった人とも話すことができ、とても勉強になった」という感想がありました。楽しみながら活動していた様子が印象的でした。

来場者は延べ1,095人となり、回収した215枚のアンケートのうち、約7割が新規来館者でした。「いろいろな活動があることを知った。もっと地域の活動を応援したい」という感想をいただきました。2017年度はボランティアとして、来場者としてなど、さまざまな切り口から市民活動に触れる機会をつくることができました。(小橋 萌佳)

想いをかたちに、そして一歩踏み出す ～TAGAJO Future Labo 3rd season～

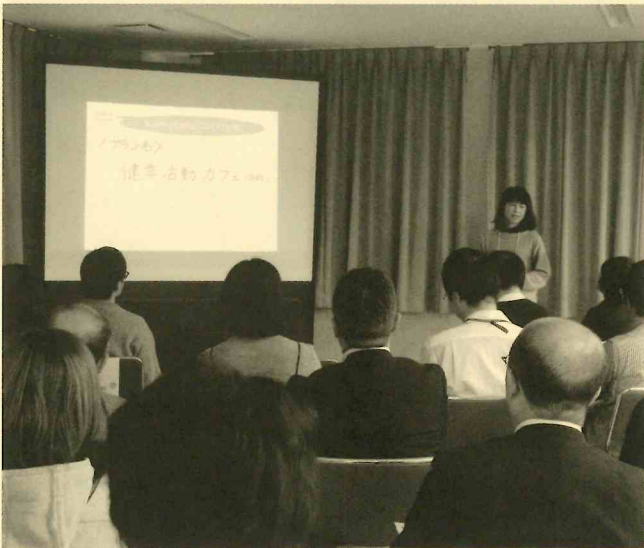
地域で「何かしたい」「自分の特技を活かしたい」という想いをかたちにする「TAGAJO Future Labo 3rd season」。7月から12月の6回講座で、受講生はゲストのお話を聞いたり、ワークショップで自分の想いを言葉にしたり、さまざまな過程を通して自分の想いをふくらませ、取り組みたいことを企画していきました。1月には、これまでのまとめとし

NPOの拠点を行政と協働運営

せんだい・みやぎNPOセンターでは、仙台市と多賀城市の市民活動サポートセンターの施設運営、柴田町まちづくり推進センターと岩沼市市民活動サポートセンターの運営支援を行っています。施設ごとに実施した事業とこれから実施する事業をお知らせします。

て「マイアプローチ発表会」を開催。子どもの居場所づくり、空き地の活用、地域での健康増進活動などのプランを市民の皆さんに向けて発表しました。

半年間の講座を通して、自分の想いを分かりやすく話せるようになったり、受講生同士だけでなくOBや発表会参加者とのつながりができたりといった成果がありました。想いを実現する一歩目を踏み出した受講生も出てきていて、今後の取り組みに期待です。
(渡辺 剛)



▲「マイアプローチ発表会」の様子

たがさぽのウェブサイトが リニューアルしました

2018年4月1日より多賀城市市民活動サポートセンターのウェブサイトが新しくなりました。これまでよりも利用目的に合わせて情報収集しやすくなりました。さらに、分野ごとに活動に役立つ情報、NPOだけでなく他セクターの社会貢献や連携についての情報のページが新たに加わりました。スマートフォンにも対応しています。この機会にぜひたがさぽのウェブサイトをご覧ください。

<多賀城市市民活動サポートセンター公式ウェブサイト>

<http://www.tagasapo.org/>

(櫛田 洋一)

柴田町まちづくり推進センター

ゆる.ぶらスタッフのパワーアップをバックアップ

柴田町まちづくり推進センター(通称「ゆる.ぶら」)は2015年度から、せんだい・みやぎNPOセンターが運営支援を行っています。「ゆる.ぶら」には、フィールドで実際に活躍する地域おこし協力隊が配属されており、まちづくりの支援施設である「ゆる.ぶら」のスタッフと連携して、住民によるまちづくりを支援しています。

2017年度のスタッフ向け人材育成研修では、柴田町のまちづくりに関する条例の理解促進、相談対応の基礎講座、地域資源を整理・共有するためのワークショップなどを行い、スタッフとしての基本を身につけました。

2018年度は、「ゆる.ぶら」スタッフ向けの人材育成研修として、相談対応のロールプレイや助成金申請相談の対応研修など、より応用的な研修に取り組みます。

(太田 貴)

岩沼市市民活動サポートセンター

2018年度、新施設が開館予定

岩沼市では現在、市民活動や町内会活動などを支援する「(仮称)地域社会活動・地域コミュニティ形成支援施設(以下、新施設)」の建設が進められています。今夏に建物が完成し、秋以降に開館となる見込みです。新施設はJR岩沼駅から徒歩数分の好立地で、2階建て。1階に交流・物販スペース、2階に人数に応じて間仕切りで仕切ることができる会議室や多目的ホールが配置されます。岩沼市市民活動サポートセンターは新施設へと移転し、その機能が強化される予定です。

せんだい・みやぎNPOセンターは、これまで6年間にわたり岩沼市市民活動サポートセンターの運営支援を行ってきました。2018年度は、これまで同様、活動相談の相談員や市民向け講座の講師派遣を通じて支援するだけでなく、新施設への移転の準備や、移転後の機能強化についても、仙台や多賀城の施設管理のノウハウなどを元に支援していく予定です。
(太田 貴)

本部事務局からの報告

当センターが運営に関わる取り組みをご報告いたします。

仙台市職員20名が、NPOの現場で体験研修

「NPO留学してみませんか」と、仙台市の協働推進人材育成事業の一環により、市の職員を市民活動団体等に派遣する体験研修が行われました。当センターは、2016年度に引き続き、受入団体への依頼・連絡調整、事前研修、実施報告会のコーディネート等を行いました。2017年度は9月下旬～12月下旬の期間に、20名の職員の方が14団体の現場へ、延べ5日間、派遣されました。

研修前後のアンケートによると、派遣職員のみなさんの「NPOの理解度」や「協働の理解度」は、現場の声を聞く機会や体験を通じ、いずれもポイントが上昇。また、受入団体へのアンケートからは、「派遣職員の多くが受入団体のことについて理解を深め、何より協働事業の成果だけでなく、現状の課題なども知っていただくことは、中長期的な視点で見れば必ずよい市民協働につながると思う」などの感想があり、相互理解を促す機会になりました。また、「市の職員とNPOの職員が、自由な意見交換やワークシ



▲1月31日に開催した実施報告会
派遣職員の方々と受入団体との意見交換

ップを通じて、10年後の仙台を語り合えるような機会があったら」と、今後に向けた提案などもいただきました。

(青木 ユカリ)

子どもたちのアイデアで、まちがパワーアップ!

3月3日、サッポロビール仙台工場ゲストホールで「なとりこどもファンド」報告会が開催されました。この事業は、名取市の未来を担う子どもたちがアイデアを出して行うまちづくり活動に助成する事業で、応募対象は名取市在住もしくは市内の学校に通学している18歳以下のグループです。東日本大震災後、名取市のまちづくり活動を応援しようとしてつくられた「西松建設まちづくり基金」の一環として行われました。

初の試みとなった2017年度は、7月の公開審査会で4団体・5つの事業が採択され、イベントの開催や児童館・福祉施設への訪問活動、地元の農業資源を活用しての商品開発に取り組んできました。報告会では、各団体が活動概要だけでなく、やって良かったことや印象に残ったこと、事業の改善点等について、自分たちの経験を基に発表。後半は、他団体のメンバーや一般参加者から出された質問や意見をもとに、団体ごと活動を振り返る時間もありました。ここでは、早くも次のステップに向けた多くのアイデアが出されました。

第2期の募集は2018年4月から。名取市のまちづくりにおいて、子どもたちのアイデアが活かされることで、まちが今以上に盛り上がり、より暮らしやすい名取市になっていくことが期待されます。

(渡辺 剛)



▲発表の様子

事務局日誌 (2017年12月～2018年3月)

2017年

●12月

- 1日～16日 センダイほろ酔い寄付キャンペーン
- 5日～23日 スタッフ面談
- 6日 2017年度東北ろうきん
復興支援助成金制度選考委員会
- 12日 東北NPO支援センター情報交換会@仙台市
- 13日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議
- 18日 ローカルグッド仙台運営委員会
- 19日 管理職会議
- 26日 仙台市協働事業提案制度検討委員会、第231回理事会

2018年

●1月

- 11日 ローカルグッド仙台運営委員会
- 12日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議
- 13日 多賀城市市民活動サポートセンター
事務用ブース審査会
- 15日 ・公益財団法人浦上食品・食文化振興財団
東日本大震災助成事業贈呈式
・仙台市との四半期ミーティング
- 17日 多賀城市との3ヶ月会議
- 19日 仙台市協働まちづくり助成ケース会議
- 22日 広報チームミーティング
- 23日 ・2018年度認定に係る
緑の活動団体検討会議オブザーバー参加
・2017年度みやぎNPOプラザ施設使用団体
選考審査会
・管理職会議
- 25日・26日 民間NPO支援センター・将来を展望する会
- 30日 第232回理事会
- 31日 2017年度「仙台市協働推進人材育成事業～
NPO留学してみませんか～」実施報告会

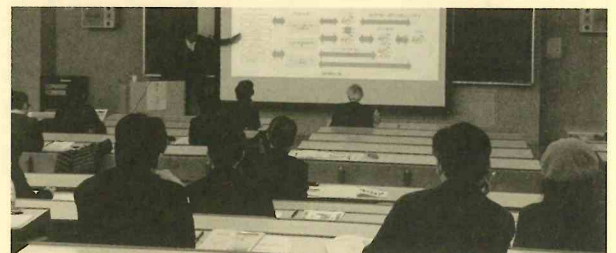
●2月

- 3日 設立20周年記念シンポジウム
- 8日 ローカルグッド仙台運営委員会

- 9日 第2回ESDネットワーク会議、
東北ESDフォーラム
- 11日 2017年度宮城県障害者福祉センター
「ライブメッセージ2018!」
- 13日 管理職会議
- 15日 復興の先を考えるミーティング in 石巻
- 16日 みやぎ広域支援団体連携担当者会議
- 17日 みやぎ生協福祉活動助成審査会
- 19日 復興の先を考えるミーティング in 気仙沼
- 20日 第233回理事会
- 23日 東北の未来をつくる新しい資金を知る会議
- 26日 2017年度第3回仙台市共同募金委員会理事会

●3月

- 3日 西松建設まちづくり基金助成事業報告会
(午前:なとりこどもファンド、
午後:第4期まちづくり基金)
- 9日 仙台市協働まちづくり助成ケース会議
- 13日 第234回理事会
- 15日 復興の先を考えるミーティング in 仙台
- 16日 多賀城市との次年度計画に関する会議
- 19日 特定非営利活動促進法(NPO法)
20周年記念プロジェクト NPO法成立20周年
記念フォーラム&記念レセプション
- 20日 管理職会議
- 22日 多賀城市との定例会議
- 23日 JCN現地会議 in 東北
- 26日 公益財団法人仙台市市民文化事業団理事会
- 28日 宮城県民間非営利促進委員会
- 30日 棚卸



▲2月15日 復興の先を考えるミーティング in 石巻の一幕

新スタッフ紹介

水原 のぞみ(みずはら のぞみ) 配属先:仙台市市民活動サポートセンター

2017年11月末から常勤職員としてお世話になっております。震災後から続けてきた植樹活動をきっかけに、実家の土地も森にすることにしました。色々な実験を検討中です。何事もトライ＆エラーを繰り返し、それを楽しみながら、日々精進して参ります。皆様、今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

鎌田 みずほ(かまた みずほ) 配属先:仙台市市民活動サポートセンター

2017年10月から常勤職員としてお世話になっております。休みの日はものづくりをしたり、作家展を観に行ったりしています。現在「仙台・杜の都のクラフトフェア」の実行委員をしています。作家を間近で見ている中で、多くの人に手仕事の良さが伝わればと取り組んでいます。不慣れな点が多く、皆様にご迷惑をおかけすることも多々ありますが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

ご寄付ありがとうございます

公益財団法人浦上食品・食文化振興財団

(2017年12月～2018年3月)

第20回 通常総会のお知らせ 日時:2018年6月17日(日)14:00～15:30(予定)

会場:仙台市市民活動サポートセンター 4階 研修室5

2017年度事業報告・収支報告、2018年度事業計画案・予算案を会員のみなさまにお諮りいたします。会員のみなさまへは郵送にて資料をお届けいたしますので、今しばらくお待ちください。

「センダイほろ酔い寄付キャンペーン」のご報告

寄付金総額:18,150円(投票以外の寄付も含む) 投票総数:358

2017年12月1日～16日に、「センダイほろ酔い寄付キャンペーン」を開催しました。このキャンペーンは、仙台市内の協力飲食店にて「ほろ酔い寄付セット」(1000円前後)を注文すると1オーダーにつき、50円がNPOに寄付されるチャリティプログラムです。キャンペーンに参加したNPO5団体の中から、セットを注文したお客さんが寄付先を投票で選ぶ仕組みです。

協力飲食店からは、地元活性化や社会課題の解決に賛同する声がありました。NPOにとっては、多くの人に自分たちの活動に関心を持ってもらうきっかけになりました。また、寄付という形で共感者の存在を確かめることができた機会でした。

このキャンペーンは、仙台では初めての試みです。誰もが気軽に市民活動やまちづくりに関わることができる入り口を作ることができました。ご参加いただいた店舗のみなさま、「ほろ酔い寄付セット」をご注文いただいたみなさま、ありがとうございました。

協力店舗:12店舗

参加NPO:NPO法人ふうどばんく東北AGAIN、NPO法人とっておきの音楽祭、NPO法人チャイルドラインみやぎ、NPO法人移動支援Rera、NPO法人仙台夜まわりグループ

主催:センダイほろ酔い寄付キャンペーン実行委員会

実行委員会は、認定NPO法人杜の伝言板ゆるる、NPO法人せんだい・みやぎNPOセンターで構成されています。

HP:<https://sendaihoroyoichari.wixsite.com/horoyoi-charity>

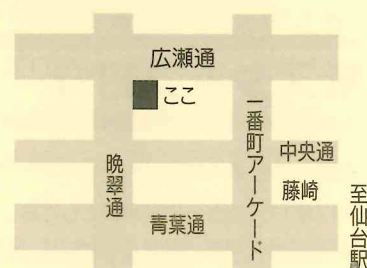


連絡先

特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター
〒980-0803 仙台市青葉区国分町1-8-10 大和ビル4階
TEL:022-264-1281 FAX:022-264-1209
E-mail:minmin@minmin.org HP:http://www.minmin.org/

発行:特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事:大滝精一 編集部:せ・み広報チーム
発行日:2018年4月16日 デザイン:氏家朗



仙台駅から徒歩20～25分